

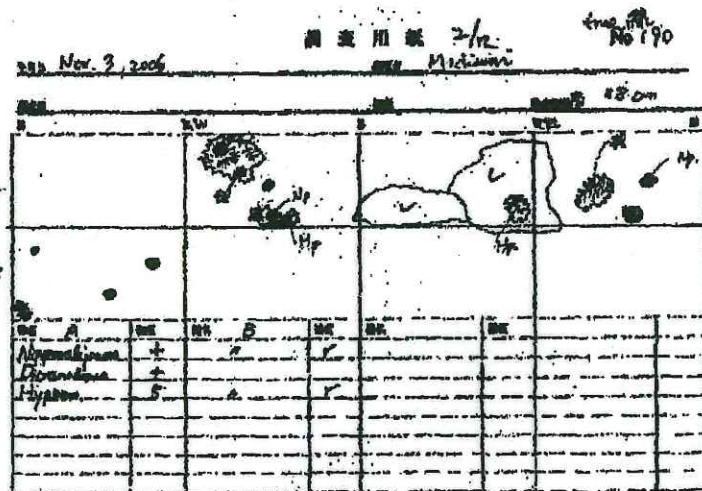
防鹿ネット(ラス巻き)の樹幹着生生物への影響について

2009. 07. 09佐久間大輔

ラス巻きは、鹿による逃避などの樹幹への加害を防ぐため、大台ヶ原においてはH6ごろより東大台地区の周回歩道沿いを中心に大規模に設置されてきた。ラスによる被害の軽減効果は、設置以降巻いた個体に枯死がでていないことから明らかであるが、一方で、藓苔類などを中心に樹幹着生する生物への影響には深刻なものがある。

道盛らは、東大台周回歩道の中道および上道沿いにて、予備的にラスによる影響を調査している。ラスが巻かれた個体の、金網上端部より、外側の幅20cmのベルト状調査区、金網内側の幅20cmのベルト状調査区を設けて、全周にわたって着生生物を調べたものである。

左図はその調査票の一例で
A欄が金網外部の着生藓苔類、
B欄が金網内部、記号はそれぞれ各種のコロニーを示している。
この調査を現在のところ12本、
トウヒ、コマツガ、ウラジロモミについて行っている。
左図からも読み取れるように、
金網内部の着生藓苔類は被服面積、種数ともに極端に減少していることがわかる。



・藓苔類の被服は樹皮の面する方位にも影響を受けるが、それぞれの方位で比較しても大きく異なっている。

・金網による影響は樹皮の方位による違いに比べても大きく、金網による被陰の影響ではないと考えられる。金網から放出される金属イオンの影響が疑われる。藓苔類の防除に金属イオンを使う方法が知られており、また、重金属を体内に蓄積してしまうことが知られている。

・今後、例数を増やして統計的な検討を可能にするとともに、経時的な影響を知るために設置年の異なる資料木を調査するなどの必要がある。

・景観的には金網による被服により、「コケに覆われた大台ヶ原の景観」は大きく減退している、といわざるを得ない。樹脂製のラスの導入は、費用面での課題はあるものの、藓苔類の影響はほとんどないようである。見た目にも、藓苔類の繁茂によって、美観的な問題も軽減されるように感じる。自然生態系への影響、という意味では、更新年数を伸ばしてでも樹脂ラスへの転換を図ったほうが好ましい。